〔エッセー〕

アマンダ・ゴーマンの詩の翻訳をめぐる論争

――翻訳者の属性は重要なのか――

小　田　　涼

はじめに

2021 年 1 月 20 日，アメリカのバイデン新大統領の就任式がワシントンで行われ，その就任式でアフリカ系女性詩人アマンダ・ゴーマン（Amanda Gorman, 1998-）が詩を朗読した。アマンダ・ゴーマン以前にアメリカの新大統領就任式で詩を朗読したのはわずか 5 人，その中には，1961 年のケネディ大統領就任式のロバート・フロスト（Robert Frost, 1874-1963），1993 年のビル・クリントン大統領就任式のマヤ・アンジェロウ（Maya Angelou, 1928-2014）などがいる。マヤ・アンジェロウは公民権運動でも積極的に活動した黒人女性詩人である。大統領就任式で自作の詩を朗読するという大役を史上最年少の 22 歳で任されたアマンダ・ゴーマンは，*The Hill We Climb*（『私たちが登る丘』）と題する詩で，分断されたアメリカ社会の危機を訴えるとともに，多様性を受け入れる国を作り上げるために調和と団結を呼びかけ，勇気を持って立ち上がれば光が見える，と未来への希望を謳った。彼女の詩のパフォーマンスは世界各国で報道され，センセーションを巻き起こす。ところが，アマンダ・ゴーマンのこの詩が外国語に翻訳されて出版されることになったとき，ひとつの論争が起きる。

1. オランダ語への翻訳

アマンダ・ゴーマンの詩の翻訳権を取得したオランダの出版社ミューレンホ

フ（Meulenhoff）は，オランダ語への翻訳をマリーケ・ルーカス・ライネフェルト（Marieke Lucas Rijneveld, 1991-）に依頼する。ライネフェルトは，散文処女作である *The Discomfort of Evening* で 2020 年にブッカー国際賞を受賞した新進気鋭の詩人・作家で，ノン・バイナリーを自認している(1)。2021 年 2 月 23 日，ライネフェルトが Facebook と Instagram でアマンダ・ゴーマンの詩を翻訳できることの喜びを表明すると，ソーシャル・メディア上で失望の声があがったという。

2 月 25 日には，オランダの新聞『デ・フォルクスクラント』（*De Volkskrant*）に黒人の活動家・ジャーナリストのヤニス・デゥール（Janice Deul）が「アマンダ・ゴーマンの詩に白人の翻訳家：理解できない」（Opinie : Een witte vertaler voor poëzie van Amanda Gorman : onbegrijpelijk）と題する意見記事を寄稿し，出版社ミューレンホフがアマンダ・ゴーマンの *The Hill We Climb* その他の詩をマリーケ・ルーカス・ライネフェルトによる翻訳で出版することについて，「私にとって，そしてソーシャル・メディアで苦痛，フラストレーション，怒り，失望を表した他の多くの人にとって，理解できない選択である」と述べ，「アマンダ・ゴーマンの詩と人生は，彼女の黒人女性としてのアイデンティティと経験によって特徴づけられている。マリーケ・ルーカス・ライネフェルトは白人でノン・バイナリーで，この分野での経験もないのに，本当に理想の翻訳家なのだろうか」と出版社の選択を厳しく糾弾したのである。Janice Deul は，「ファッションでも芸術でもビジネスでも政治でも文学でも，黒人は評価されることが少なく，マージナルな存在である。（･･･）なぜアマンダ・ゴーマンのような，spoken word artist で，若い女性で，黒人であることに誇りを持っているような作家に翻訳を依頼しないのか。そのような資格を持つ人を私は何人も知っている。」と述べ，“Black spoken word artists matter”と主張する。同じ日の新聞『デ・フォルクスクラント』によると，ミューレンホフは Twitter で，「アマンダ・ゴーマンとライネフェルトはいずれも若くして国際的に高い知名度を得ており，自らの意見を表明することを恐れない，そしてライネフェルトはインクルーシブな社会の実現に情熱を持っている」，「アマン

ダ・ゴーマンと彼女のチームも我々の選択に対して肯定的に答えた」と述べ，翻訳者としてのライネフェルトを擁護している。アマンダ・ゴーマンとそのチームは，ノン・バイナリーであるライネフェルトがセクシャル・マイノリティーの闘いを体現する存在であることから，ミューレンホフの人選を支持したようである（*Le Monde,* 2021 年 3 月 3 日）。

しかし，こうした世論を受けて 2 月 26 日，マリーケ・ルーカス・ライネフェルトはゴーマンの詩の翻訳を辞退するのである。「アマンダ・ゴーマンのメッセージを広めることに私が関わることについて生じた論争にショックを受けましたが，出版社が私を選んだことに傷ついた人たちのことは理解できます」とライネフェルトは述べている（*The Guardian,* 2021 年 3 月 6 日）。

アマンダ・ゴーマンの詩のフランス語版を出版するファイヤール（Fayard）は，コンゴ出身のベルギー人歌手マリー＝ピエラ・カコマ（Marie-Pierra Kakoma. アーティスト名は Lous and the Yakuza）に翻訳を依頼したことを 2 月半ばに発表しており，オランダではこの人選を称賛する人もいるという（*Le Monde,* 2021 年 3 月 3 日）。

2. カタルーニャ語[(2)]への翻訳

翻訳者の属性（性別，年齢，肌の色など）が問題になったのは，オランダ語への翻訳についてだけではなかった。カタルーニャの作家ビクトル・オビオルス（Victor Obiols）は，バルセロナの出版社 Univers からアマンダ・ゴーマンの詩の翻訳を依頼されるが，彼女の詩の翻訳者として適切なプロフィールではないとして，後に契約を解除されてしまう。この契約破棄がアマンダ・ゴーマンのエージェントによるものか，それともアメリカの出版社によるものかはわからないのだが，オビオルスの翻訳者としての能力が問題視されたのではなく（オビオルスはシェークスピアやオスカー・ワイルドの作品を翻訳している），異なるプロフィールの翻訳者が求められており，「女性で，活動家としてのプロフィールを持ち，可能であればアフリカ系（つまり黒人）の翻訳者を探

している」からだという（*ARA,* 2021 年 3 月 13 日 & *Le Monde avec AFP,* 2021 年 3 月 11 日）。

「これは軽々しく扱うことのできない，とても複雑な問題です」と前置きしたうえで，オビオルスは次のように言う。「もし 20 世紀のアメリカの若い黒人女性の詩を（同じ属性を持たないという理由で）私が翻訳できないというのであれば，紀元前 7 世紀のギリシャ人でない私はホメロスを訳すこともできませんし，15 世紀のイギリス人でない私はシェークスピアを訳すこともできないでしょう」と（*Le Monde avec AFP,* 2021 年 3 月 11 日）。

3. ドストエフスキーの翻訳
――ロシアの魂はロシア正教徒にしか理解できない――

ドストエフスキーの全作品をフランス語に翻訳しているアンドレ・マルコヴィッチ（André Markowicz）は，アマンダ・ゴーマンの詩の翻訳をめぐる論争について，2021 年 3 月 11 日付けの『ル・モンド』（*Le Monde*）に寄稿する。『デ・フォルクスクラント』に掲載された前述の Janice Deul の意見記事を紹介し，マルコヴィッチは次のように言う。「ライネフェルトは白人だから，黒人の作品を翻訳することはできない，ということである。このオランダのジャーナリストにとっては，シングルマザーに育てられ発声の問題を抱えていた少女のドラマを理解するには，黒人であれば十分である，ということが明らかである。白人女性の翻訳家は，たとえシングルマザーに育てられ発声の問題を経験していたとしてもアマンダ・ゴーマンの詩を訳すチャンスはないだろう。なぜなら，すべての問題は肌の色という変えようのないアイデンティティにあるのだから」と。

Deul は「アマンダ・ゴーマンの詩を訳すには黒人であれば十分である」とは言っておらず，彼女の主張がいささか歪められて紹介されていることには注意しなければならない。Deul の主張の重点は，「黒人の作家・翻訳家にこの詩の翻訳を任せていれば，これまで文学界（およびその他多くの分野）で才能は

あってもマージナルな存在であった黒人の作家・翻訳家が衆目を集める良い機会になったのに」ということにある。加えて，アマンダ・ゴーマンがおそらくは“Black lives matter”運動を踏まえて大統領就任式の詩人として選ばれたこともDeulにとっては重要であったと思われる。この点については，あらためて6でも論じる。

マルコヴィッチによるオランダ人ジャーナリストの主張の解釈には多少問題があるが，それは彼自身が自らの翻訳についてなされた理不尽な批判に少なからず傷つけられたせいかもしれない。あるロシア正教徒の批評家は，「マルコヴィッチによるドストエフスキーの翻訳は疑わしい，なぜならマルコヴィッチはロシア正教徒ではない，ロシア正教徒だけがロシア正教徒を理解できるのだから」と言ったという。その批評家は，たとえロシア人であってもユダヤ教徒にはロシアの魂（l’âme russe）は理解できない，と考えているらしいのである。マルコヴィッチによれば，こうした肌の色や人種，民族によって人間を細分化するという考え方は，翻訳というもの ―― 何よりもまず，共有，共感であり，自分ではないもの，他者を受け入れることである ―― とはまったく逆のものである。「私に翻訳する権利があるのかないのか，誰にも私に言う権利はない。だが，私が翻訳した作品について，私の声，私の言葉によって他者の言葉を私が伝えることができたかどうかを判断する権利は誰もが持っている」とマルコヴィッチは述べる。確かに，翻訳者が原作の著者と異なる宗教，民族，肌の色であるからという理由で正しい翻訳ができるはずはない，と決めつけるのはおかしな論理であるように思われる。

4. 文学および翻訳の本質は他者との共有・共感にある

アマンダ・ゴーマンの詩のオランダ語への翻訳をライネフェルトに依頼したミューレンホフは，ジョー・バイデン新大統領の就任式が極めて象徴的な瞬間（moment incroyablement symbolique）であることを自覚しておらず，アマンダ・ゴーマンの詩の苦しみと希望（la douleur et l’espoir du texte d’Amanda

Gorman）も認識していなかった，とアントワープの詩人 Seckou Ouologuem は批判する（*Le Monde,* 2021 年 3 月 3 日）。このベルギーの詩人は，「アマンダ・ゴーマンと同じような経験をしたことがなければ，彼女の詩をあまりにも美しく，あまりにもきちんと（trop belle et trop propre）訳しすぎる危険がある」という（*Ibid.*）。

だが，何かの翻訳をするとき，オリジナルのテクストの作者と同じような経験をしていなければ，適切な翻訳はできないのだろうか。

ユダヤ教の女性ラビとしてフランスのメディアでたびたび発言し，作家でもあるデルフィーヌ・オルヴィルール（Delphine Horvilleur）は，2021 年 3 月 14 日付けの『ル・モンド』のインタビューでアマンダ・ゴーマンの詩の翻訳をめぐる論争について言及している。オルヴィルールは，「私にとって最も大事なのは，自分の外を旅すること（voyager hors de soi），私たちをより大きな存在にして結びつける橋を見いだすこと」，「文学は，自分がわからない他者の世界に入り込むことを可能にする」と述べた後で，「誰がアマンダ・ゴーマンの詩を訳すべきかという議論は馬鹿げている，翻訳というのは原作者とは異なる人がすることにその目的がある，原作者の世界と翻訳者の世界との出会いがふたつの世界の行き来を可能にするのである」という趣旨のことを述べている。デルフィーヌ・オルヴィルールのこの視点は，先に紹介したアンドレ・マルコヴィッチの「翻訳とは共有，共感であり，自分ではないもの，他者を受け入れることである」という視点につながるものである。

文学や芸術は，まさに自分のアイデンティティから抜けだして，別の共同体の文化を体験することを可能にするものである。「同じ民族，同じ宗教，同じ文化的背景，同じ人種でなければ，その作家の作品を翻訳できない」と主張することは，文学や芸術の本質を否定することであり，その主張が正しければ，異なる文化の者同士のあいだに相互理解は存在しないということになってしまう。

文学および翻訳の本質は他者との共有，他者との共感にあるのだから，異なる民族・宗教・人種の作品であっても，異文化についての知識・教養を身につ

け言語的な訓練・鍛錬を積み重ね他者との対話を経験することによって，その作品を適切に，作品の世界を壊さずに翻訳することができるようになるはずである。

5. 肌の色や性別による人のグループ分けは人種差別

Janice Deul による意見記事が最初に発表された『デ・フォルクスクラント』では，その後，複数のジャーナリストが記事を書いている。そのうちの一人，Wilma de Rek の 2021 年 3 月 1 日付けの記事を紹介しよう。Wilma de Rek は，「明るい肌の，ノン・バイナリーの人間が，暗い肌のバイナリーの人間の書いた詩を訳すことができるのかという問いに対しては，イエス（‘ja’）と答えるのが最も明白な答えである」と述べ，「肌の色や性別によって人をグループ分けすることは人種差別である」と続ける。そして，「肌の色や性別，性的志向は人のアイデンティティの一部ではあるが，人を決定づけるものではない」と述べた上で，アマンダ・ゴーマンの大統領就任式の詩から“We close the divide because we know to put our future first, we must first put our differences aside.”（人々のあいだにできた亀裂を埋めよう，なぜなら未来を第一に考え，まずお互いの差異を脇に置かなければならないからだ。）という一節を引用し，「この翻訳に関する議論は，人々の外的な差異を強調するのではなく，差異を埋めるものでなくてはならない」，「文学とは他者の立場に身を置くことから成り立っている。あらゆる作家がいかなる主題についても書くことができる。そして彼らの想像の産物は，いかなる翻訳者が外国語に訳しても構わないのである」と主張し，暗に Deul を批判するのである。

Wilma de Rek の言うことは正論ではあるが，今回のアマンダ・ゴーマンの詩の翻訳をめぐって Janice Deul の提起した本質的な問題からは逸れた議論になっている。

『ガーディアン』紙のコラムニストの Kenan Malik（インド出身のイギリス人作家）は今回の論争について，「黒人の翻訳家がしばしば無視されているの

は事実であるが，差別を問題にするのであれば，黒人の詩人には黒人の翻訳家が必要であるという議論ではなく，作家の肌の色とは関係なくもっと多くの黒人の翻訳家が採用されるべきだという議論がされなければならない」と主張する（*The Guardian,* 2021 年 3 月 7 日）。Kenan Malik のこの主張は Janice Deul の考えとそれほど隔たりがあるとは思われないが，Malik は，「ライネフェルトがゴーマンの詩の良い翻訳家となれたかどうか自分には判断できないが，このことを判断するのにライネフェルトが白人であるという事実は何の基準にもならない」とも述べている。

6. 文学界における多様性

Janice Deul による問題提起の主眼のひとつは，「暗い肌の作家の作品は，明るい肌の翻訳者には正しく翻訳できない」と主張することにあるのではなく，「アマンダ・ゴーマンの詩の翻訳の出版は，世に出る機会に恵まれないアフリカ系の詩人・翻訳家を表舞台に送り出す絶好の機会であった」と主張することにあったと思われる。彼女の 2 月 25 日の記事を丁寧に読めばそのことはわかるはずであるが，「人種や性別が同じでないと適切な翻訳ができないと言うのは馬鹿げている」と Deul を批判するジャーナリスト・作家・翻訳家は少なくなかったのである(3)。

この議論のすれ違いは，“Black lives matter”（黒人の命は大事／黒人の命を尊重せよ）と叫ぶ人々に対抗して，一部の人がそれを打ち消して“All lives matter”（すべての人の命が大事）のスローガンを掲げた（掲げている）ことを思い起こさせる。“Black lives matter”という宣言は「黒人以外の人間の命は重要ではない」ことを意味するものではないのに，あたかも黒人の命だけが重要であるという主張に曲解して，“All lives matter”というスローガンで“Black lives matter”運動に対抗しようとしているのである。

自分の真意が正しく伝わっていないことに気がついた Deul は，後に BBC に対して，「黒人が白人の作品を翻訳できないとは言っていないし，その逆も

（つまり白人が黒人の作品を翻訳できないとも）言っていません。ただ，“Black lives matter”の領域のこの詩人のこの詩だけは違うのです，それが問題のすべてなのです」と説明している（*The Washington Post,* 2021 年 3 月 11 日）。また，電話インタビューで Deul は，「誰が翻訳できるかということではなく，誰が翻訳するチャンスを得ることができるか，という問題なのです」と話している（*New York Times,* 2021 年 3 月 26 日）。つまり，“Black lives matter”運動を踏まえた政治的背景の中で詠まれたアマンダ・ゴーマンの詩は特別であり，チャンスに恵まれない黒人の作家・翻訳家に翻訳を依頼する絶好の機会であった，と Deul は主張しているのである。

ベルギーの新聞『デ・モルヘン』（*De Morgen*）のコラムニスト Mohamed Ouaamari は，Deul の論説が「文学界における多様性の欠如」を問題にしていること，“Black lives matter”運動が起こったすぐ後にアフリカ系の詩人によってこの詩が詠まれたことの重要性を理解した一人である。Ouaamari は 3 月 1 日付けの『デ・モルヘン』（*De Morgen*）で，「白人が黒人の物語を書いたり翻訳したりしてよいのか，そしてできるのか。それは理屈の上では可能だし，実際にそういうことはある」と前置きし，「（作品やその翻訳の）結果が期待に答えられたものかどうか，異なる肌の人にも理解されるものかどうかは，発表された作品のみについて判断される。良い文学がどのようなものかは，文筆のクオリティが決定するのであって，肌の色が決めるのではない」と主張する。そして，「問題は，今日，マイノリティーの文筆家のための場所はほとんどなく，文学界はアントワープ港に上陸したコカインと同じくらい白いのである(4)（de literaire sector nog steeds even wit is als de cocaïne die aan wal wordt gebracht in de Antwerpse haven）」と述べ，（オランダ・ベルギーの）文学市場は白人の作家が大多数で，多様性が欠けている，と指摘している。「アメリカの歴史上，最も若い黒人の詩人が大統領就任式で詩を朗読することになったのである。これが 2020 年の“Black lives matter”運動の後に起きたことは，偶然ではない。私たちの声を聞いて，社会に居場所を与えて，という声をバイデン大統領・ハリス副大統領のチームは聞き届け，まだ無名の若い詩人に舞台で詩を朗読する

機会を与えたのである。アマンダ・ゴーマンは自分自身を“skinny Black girl”と表現している。つまり，彼女の肌の色が重要だったのだ」と Mohamed Ouaamari は述べている。

アメリカ文学翻訳家協会（The American Literary Translators Association）は，2021 年 3 月 22 日に発表した声明（ALTA Statement on Racial Equity in Literary Translation(5)）のなかで，「アメリカの中でも外でも，文学作品の翻訳の世界では人種的平等は実現されていない」ことを認め，「誰が誰を翻訳できるかという問題に翻訳家のアイデンティティが決定的な要素となるか否かという議論は，今回の論争を間違った観点から捉えている。この論争の根本的な問題は，黒人の翻訳家の数が不足しているということにあるのだ」と述べている。2020 年にアメリカ文学翻訳家協会が行った調査によると，362 人の翻訳家のうち黒人はわずか 2 パーセントであったという（*New York Times,* 2021 年 3 月 26 日）(6)。

翻訳者が原作の著者と同じ肌の色であるかどうか，同じ経験をしているかどうかについての問題と，文学界における多様性の問題とは，区別して論じなければならない。「黒人でなければ黒人作家の作品を翻訳できない」という主張がナンセンスであることは誰もが認めているが，文学市場において多様性が欠けていることもまた否定できない事実なのである。

ノーベル文学賞の受賞者の出身地域の分布は，世界の文学市場が白人作家によって支配されている例のひとつとみなせるかもしれない。1901 年から 2021 年までにノーベル文学賞を受賞した作家は 118 人，そのうちアフリカ系の作家またはアフリカ大陸出身の作家は 1986 年のウォーレ・ショインカ（ナイジェリア），1988 年のナギーブ・マフフーズ（エジプト），1991 年のナディン・ゴーディマー（南アフリカ），1993 年のトニ・モリスン（アメリカ），2021 年のアブドゥルラザク・グルナ（タンザニア）の 5 人（ただし，アラビア語で書いたナギーブ・マフフーズ以外の 4 人の作家は英語で作品を書いている），アジア系の作家は 1968 年の川端康成，1994 年の大江健三郎，2000 年の高行健，2012 年の莫言，2017 年のカズオ・イシグロの 5 人である（カズオ・イシグロ

は英語で書いている)。ノーベル文学賞受賞者のうち，英語話者の受賞者が約30人，フランス語系作家とドイツ語系作家がそれぞれ約15人であるのに対し，アフリカ系とアジア系の受賞者は少ないように感じられる。だが，2021年のノーベル文学賞がタンザニア出身の作家に授与されたのは，2020年の“Black lives matter”運動と2021年のアマンダ・ゴーマンの翻訳論争を考慮したからだと思うのは，考えすぎだろうか。

7. フランス語版の翻訳

2021年2月17日，フランスの出版社ファイヤール（Fayard）は，コンゴ民主共和国出身のベルギー人シンガーソングライターのルース・アンド・ザ・ヤクザ（Lous and the Yakuza）の翻訳でアマンダ・ゴーマンの詩のフランス語版を5月に出版することを発表する(7)。オランダ語版の翻訳をめぐる論争が勃発するより前にファイヤールがアフリカ系の歌手に翻訳を依頼していたことは，“Black lives matter”運動の流れを受けてアマンダ・ゴーマンがアメリカの新大統領就任式で詩を朗読したことの歴史的な意味を出版社が理解していたからだろうか。だが，ファイヤールの社長ソフィー・ド・クロゼ（Sophie de Closets）は次のように言う，「若い黒人の女性詩人を訳すのは若い黒人女性でなくてはならない，なんて思ったことはありません。私は何年も前からルース・アンド・ザ・ヤクザの活動を追っています。アマンダ・ゴーマンのテクストの出版計画が明確になったとき，私はすぐに彼女のことを考えたのです。彼女なら，オリジナルのテクストの音楽性（musicalité）や口承性（oralité），感受性（sensibilité）を表すことができます」と（*Le Monde,* 2021年5月17日）。

ルース・アンド・ザ・ヤクザ（以下，ルース），本名マリー＝ピエラ・カコマ（Marie-Pierra Kakoma）は，2021年5月18日付けの『ル・ポワン』（*Le Point.fr*）のインタビューでオランダ語版の翻訳者をめぐる論争について聞かれ，次のように答えている。「この問題にはふたつの見方がある。純粋に知的な観点から言えば，翻訳はふたつの文化のあいだに存在するもの，お互いに意

思疎通ができない人々のあいだのコミュニケーションを創造するものだから，肌の色は翻訳をするための基準にはならない。でも，社会的な観点から言えば，選択の余地はない。私のミュージック・ビデオで黒人の俳優しか使わないのは，そうしなければ他の場所で彼らを見ることはないから。英語とフランス語あるいはオランダ語のバイリンガルの黒人や翻訳ができる黒人の学生はどこにでもいる」と。ルースは，同じ肌の色でなければ翻訳できないというのはおかしいと認めながらも，能力はあってもチャンスに恵まれない黒人アーティストに仕事を与えることには社会的に意味がある，というのである。ルネッサンス文化と同じくらいアジアに取り憑かれているというルース(8)は，「自分にとって文化の融合は世界で最も美しいもの」といい，今回の翻訳論争を引き起こした社会的状況を嘆く。

8. 翻訳の難しさ
――翻訳者は原作の共著者である――

アマンダ・ゴーマンの詩のドイツ語版は，アフリカ系ジャーナリストの Hadija Haruna-Oelker，トルコ系ジャーナリストの Kübra Gümüsay，翻訳家の Uda Strätling の 3 人によって翻訳され，Hoffmann und Campe 社から出版されることになっていた。出版社は，オランダ語版の翻訳者をめぐる論争が起きるより前にドイツ語版の翻訳者を選んでいたという（*Die Presse,* 2021 年 3 月 30 日）。この翻訳チームは，翻訳者のプロフィールについて政治的正しさの観点からは批判の余地がない，バランスのとれた構成であったと言えるだろう。だが同時に，3 人の翻訳者のうち文学作品の翻訳の専門家は Uda Strätling 一人であり，他の二人は翻訳家というより政治・フェミニズム・人種差別問題などについて執筆するジャーナリスト・活動家として知られていることも付け加えておかなければならない。そして 3 月 30 日にドイツ語版が出版されると，その翻訳は多くの新聞・メディアで酷評されたのである。ここでは，ドイツおよびオーストリアの四つの新聞に掲載された批評を紹介する。

2021年3月30日付けのドイツの『ケルニッシェ・ルントシャウ』（*Kölnische Rundschau*）は，「アマンダ・ゴーマンの詩のドイツ語訳は，詩というより政治的宣言（マニフェスト）を，讃歌というよりむしろ政党の綱領を思わせるものだった。翻訳者たちは，オリジナルのテクストから，そのテクストを強くしているもの，韻や音の一致を取り除いてしまった。それらは飾りではなく，意味を担っていたのに。ゴーマンが具体的に的確に言葉を用いた箇所で，翻訳者たちは弱々しい訳語を当ててしまった。この翻訳は，オリジナルが持つエネルギーの流れを遮断するように作用している」と評している（*Kölnische Rundschau,* 2021年3月30日）。

オーストリアの『ディー・プレッセ』（*Die Presse*）も，「ドイツ語訳では，多くの表現が政党集会の言葉のようである」と『ケルニッシェ・ルントシャウ』と同様の指摘をし，さらに「宗教的トレモロ，激情，国民（Nation）と我々（Wir）への呼びかけ，こういったものは現代のドイツ語圏の詩には見られないものであり，Wir（我々）が多すぎて詩をだめにしてしまった」と述べている（*Die Presse,* 2021年3月30日）。

『南ドイツ新聞』（*Süddeutsche Zeitung*）は，「アマンダ・ゴーマンの詩はアフリカ系アメリカ人の Oral Poetry の伝統に基づいており，歴史的瞬間と音声言語（gesprochene Sprache）から切り離されて紙に印刷されてしまうと，オリジナルの英語の詩ですら生きたものにならない。とりわけドイツ語では陳腐なものになってしまう。翻訳が失敗するのは必然的である」と言う（*Süddeutsche Zeitung,* 2021年3月31日）。

最も辛辣な批評は，『デア・シュタンダード』（*Der Standard,* 2021年3月30日）のジャーナリスト Michael Wurmitzer のものだろうか。「アマンダ・ゴーマンの詩のドイツ語訳は最大級の失敗作である」と述べ，「オリジナルの詩にある belly of the beast は聖書のヨナの物語（海に投げ出されたヨナは鯨に飲み込まれ，鯨の腹の中で3日間過ごす）を踏まえているのに，ドイツ語訳は belly of the beast を「深淵」（Abgrund）と訳してしまうことで聖書の物語への言及が失われ，ゴーマンの詩に謳われている出発の考えと鯨に吐き出されて明

るい世界に出たヨナとが結びつかなくなっている(9)，belly of the beast は牢獄や不公平な法制度をも表しているのに」と具体的に翻訳の問題点を指摘する。また，「ほとんどすべての詩節について，Google 翻訳プログラムが提案する訳語のほうが信頼できるものである。例えば，翻訳者たちはなぜ原詩にある intimidation（威嚇，脅迫）を Google 翻訳プログラムが示すように Einschüchterung（威圧）と訳さず，ぎこちない Störmanöver（妨害工作）という訳語を選んだのか。この訳語は人種差別的攻撃をほとんど無害化している」と指摘する。そして，「この翻訳には，特定の体験を共有していない人はあることについて話す資格がないとする過去数週間に行われた議論が奇妙に屈折して表れている。というのも，白人ではない二人の翻訳参加者にもかかわらず，この翻訳は失敗した。この翻訳チームは職人的な基礎よりも，政治的正しさと自ら体験した多様性による真正さに信頼を置きすぎたのだろうか。文学翻訳という仕事の価値を高めるのは，ひとつの作品を，おのれの経歴とは無関係に，テクスト素材に相応しくそして伝統と過去の事項に関する知を用いて翻訳することなのに」と厳しく批判する。しかしいっぽうで，ジャーナリスト Janice Deul がオランダ語版翻訳の出版を「文化的な分野で有色人種（People of Color）は過小評価されている」ことを指摘する機会と捉えたことは理解できる，と Michael Wurmitzer は認めている。

ドイツ語訳が各メディアで酷評されたことは，文学作品の翻訳の難しさをあらためて認識させる出来事であった。奇しくも，ドイツ語版が出版される約 3 週間前に『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング』において，Tobias Rüther はオランダ語版の翻訳者にまつわる論争についての記事で「別の言語に翻訳されたものは，常に翻訳とは少し異なるものである。翻訳は決して原作と同じではない」と述べている（*Frankfurter Allgemeine Zeitung,* 2021 年 3 月 7 日）。イタリア語には，Traduttore, traditore.（翻訳者は裏切り者）という諺もある。どれだけ原文に忠実に別の言語に置き換えようとしても，原文のほのめかすものが抜け落ちてしまったり，あるいは逆に原文が意図していないことを図らずも伝えてしまったりするのである。

2021 年 5 月 17 日付けの『ル・モンド』で，作家兼ジャーナリストの Alexandre Duyck は，アマンダ・ゴーマンの詩の翻訳者をめぐる論争に関連して原作者と翻訳家のさまざまな関係について論じている。フランス文芸翻訳家協会（L'Association des traducteurs littéraires de France = ATLF）によると，翻訳家の平均年齢は 53 歳，翻訳家の 79.5% は女性で，64% は生計を立てるために別の仕事もしており（その三分の一は教員である），原作者が数百万稼いだとしても，翻訳家の印税は大抵の場合 1% にとどまる。翻訳家は，その名前が本の表紙に記されることが以前より多くなったとは言っても，ほとんどいつも目に見えない存在なのである。Alexandre Duyck は原作者と翻訳家が仕事を通じて親しくなり良い関係を構築している例として，アメリカの作家ラッセル・バンクス（Russell Banks）と彼の作品を翻訳する作家ピエール・フュルラン（Pierre Furlan）を取りあげる。バンクスは翻訳家フュルランの言葉の選択の正確さを誉め，言語に関して決してライバル関係にならないフュルランと自分の関係を理想的であると言う。良い翻訳とはどういうものかと尋ねられたバンクスは，「テクストを自分のものとし，翻案すること，ただし映画監督がするようにではない。翻訳者はテクストの読者以上のものであり，ほとんど共著者である（Une réappropriation du texte, une adaptation, mais pas comme le ferait un cinéaste. Le traducteur est plus qu'un lecteur du texte : presque un coauteur.）」と述べる（*Le Monde,* 2021 年 5 月 17 日）。

「翻訳者は原作の共著者である」というバンクスのこの考え方は，翻訳という作業の難しさへの理解と翻訳者を尊重する姿勢の表れと言えるだろう。イギリスのブッカー国際賞（原著が英語以外の言語で書かれ，英語に翻訳された文学作品に与えられる）が原著者と翻訳者の両方に与えられる賞であるのも，同じ考えによると思われる。

おわりに

本稿では，2021 年 1 月のアメリカ新大統領就任式で詩を朗読したアマン

ダ・ゴーマンの詩の翻訳をめぐって繰り広げられた興味深い論争と視点を紹介した。

オランダのジャーナリスト Janice Deul は，「翻訳者は原作の著者と同じ肌の色でなければならない」と主張していると間違って解釈されたために批判の矢面に立たされた。だが Deul の主張は，“Black lives matter”運動の流れを受けて黒人の女性詩人が新大統領就任式で詩を朗読したことの歴史的な意味を踏まえて，表舞台で活躍する機会の少ない黒人作家に翻訳を依頼する絶好の機会である，というものであった。

文学および翻訳の本質は他者との共有，他者との共感にあるのだから，「黒人でなければ黒人作家の作品を翻訳できない」という主張は筋の通らない理屈である。だが，文学市場において多様性が欠けていること，文学界でアフリカ系の作家・翻訳家が少ないことも事実なのである。翻訳者が原作の著者と同じ肌の色であるかどうか，同じ経験をしているかどうかについての問題と文学界における多様性の問題とは，区別して論じる必要がある。

翻訳の本質が他者への共感にあるとは言っても，翻訳が原著と完全に同じ意味，同じ価値を伝えられるわけではない。アマンダ・ゴーマンの詩のドイツ語訳が各メディアに酷評されたことは，翻訳という作業がいかに難しいものであるかをあらためて認識させる出来事であった。

ロマーン・ヤーコブソン（Roman Jakobson）は『一般言語学』（*Essais de linguistique générale*[10]）所収の論文「翻訳の言語学的側面について」のなかで，「詩の翻訳は，定義上，不可能である（la poésie, par définition, est intraduisible.）」と述べている。萩原朔太郎も，「詩の翻訳について」と題する随筆[11]で，「如何なる語学の才能を以てしても，詩（特に俳句）の満足する翻訳は出来ない」，「詩は，むしろ翻案すべきものであつて翻訳すべきものではない」と言う。

翻訳の可能性・不可能性について論じることは本稿の趣旨ではないので，これ以上深入りすることはしないが，最後にジム・ジャームッシュ（Jim Jarmusch）の 2016 年の映画『パターソン』（*Paterson*）から，印象的な台詞を

紹介する。本業はバスの運転手だが詩を書くことが趣味の主人公パターソンと，日本人の詩人が初めて会って話す場面である(13)。

Paterson : I guess you really like poetry, then?
Japanese Poet : I breath poetry.
Paterson : So, you write poetry?
Japanese Poet : Yes. My notebooks.
Paterson : Ah, yeah.
Japanese poet : My poetry only in Japanese.
No translation.
Poetry in translation is
like taking a shower with a raincoat on.

（*Paterson,* film by Jim Jarmusch）

「詩を翻訳で読むことは，レインコートを着てシャワーを浴びるようなもの」と日本の詩人は言うのである。

＊ドイツ語の新聞『ケルニッシェ・ルントシャウ』，『ディー・プレッセ』，『デア・シュタンダード』の記事の読解については，関西学院大学文学部教授の木野光司先生にご教示いただきました。心より感謝申し上げます。

注

(1) ライネフェルトに対して，英語での人称代名詞は they/them が用いられるが，オランダ語では女性形の zij/haar（she/her）が用いられる。フランス語圏のメディアでは，elle（彼女）や écrivaine や autrice（作家）といった女性形が使用されている（作家 auteur の女性形としては，auteure と autrice のふたつが存在する）。フランス語では，il と elle を合わせた縮約形（contraction）の iel が通性の 3 人称代名詞として（ノン・バイナリーの人などについて）一部で使用されているが，その使用はまだ定着していないようである（*Le Monde,* 2021 年 11 月 17 日）。

(2) カタルーニャ語は，スペイン東部および南フランスやイタリアのサルデーニャ島

の一部，アンドラ公国などで話されている言語である。スペイン語（またはカスティーリャ語）はスペイン全土の公用語であるが，カタルーニャ語はヴァレンシア語やガリシア語，バスク語とともに地方公用語である。また，アンドラ公国ではカタルーニャ語が公用語である。

(3) 作家であり翻訳家でもある René de Ceccaty（イタリア語と日本語の翻訳の専門家）も，「黒人作家を翻訳するためには黒人でなくてはならないという考えは恐ろしい。政治的な正しさという考えが文化のあらゆる分野に氾濫しているために，人々は正気を失っている」と言う（*Le Point.fr,* 2021 年 3 月 4 日）。いっぽう，ユダヤ系作家である前述のマルコヴィッチはこの問題の複雑さに気がついていないわけではないようである。マルコヴィッチは，「白人の特権（privilège blanc）を持つ自分には Janice Deul の意見を人種差別だと言うことはできない，と断言する人もいるだろう」と述べている（*Le Monde,* 2021 年 3 月 11 日）。

(4) 2021 年 2 月 24 日付けの *Le Monde avec AFP* によると，2 月 12 日にドイツのハンブルグ港に到着したコンテナ 5 基から 16 トンのコカインが，続いてベルギーのアントワープ港の積み荷から 7.3 トンのコカインが見つかっている。アントワープ港は，ハンブルグ港と並んでヨーロッパ最大のコカイン流入口となっている。

(5) The American Literary Translators Association, “ALTA Statement on Racial Equity in Literary Translation”（https://literarytranslators.wordpress.com/2021/03/22/alta-statement-on-racial-equity-in-literary-translation/）

(6) 2021 年 3 月 22 日付けの *Los Angeles Times* によると，アメリカ文学翻訳家協会（ALTA）が最近行った調査では，翻訳家のうち 73% が白人，11% がアジア系，10% がヒスパニア系・ラテン系，4% が中東または北アフリカ系で，黒人の翻訳家は 2% であったという。

(7) フランス語版の出版計画に際して，Fayard 以外の出版社にもコンタクトがあったが，アマンダ・ゴーマンのテクストに興味を示さなかった出版社もあり，また 10 万ユーロ（Fayard 社はこの価格を否定している）とも言われる版権の前に諦めた出版社もあった（*Le Monde,* 2021 年 5 月 17 日）。

(8) Marie-Pierra Kakoma の芸名 Lous and the Yakuza の“Lous”は英語の soul のアナグラムであり，“the Yakuza”はもちろん日本語の「ヤクザ」に由来する。“the Yakuza”は，ダンサーやミュージシャン，プロデューサーからなる彼女のチームを表している（*L’Express,* 2020 年 3 月 10 日）。ルースは『ル・ポワン』誌のインタビューで，最も好きな歌手として奄美の民謡歌手である朝崎郁恵の名前を挙げている（*Le Point.fr,* 2021 年 5 月 18 日）。

(9) Amanda Gorman の詩の“We’ve braved the belly of the beast”（我々は獣の腹に勇敢に立ち向かった）がドイツ語訳では Wir haben tief in den Abgrund geblickt（我々は深淵をのぞき込んだ）と訳されている。

⑽ Jakobson, Roman. *Essais de Linguistique générale, Tome 1*（traduit de l'anglais et préfacé par Nicolas Ruwet), Paris, Éditions de Minuit, 1963.（ロマーン・ヤーコブソン『一般言語学』川本茂雄他訳，みすず書房，1973 年。）

⑾ 萩原朔太郎「詩の翻訳について」『萩原朔太郎全集　第九巻』筑摩書房，1976 年。

⑿ 主役のパターソンはアダム・ドライバー（Adam Driver）が，日本人の詩人は永瀬正敏が演じている。パターソンはニュージャージー州パターソン市（主人公と同名の街である）のバス運転手で，趣味で詩を書いている。2017 年の日本での映画公開時のパンフレットに掲載された監督インタビューによると，運転手役だからアダム・ドライバーが選ばれたわけではなく，これは偶然の一致であるという。映画のなかでパターソンが書く詩は，アメリカの詩人ロン・パジェット（Ron Padgett）の詩であり，いくつかの詩はこの映画のために創作された。

参考文献

【以下，参考にした新聞記事を年代順に記す。各記事は，著者名（署名記事の場合），記事タイトル，新聞名，発行年月日の順で記す。新聞記事データベース Nexis Uni や筆者が個人的に電子版を定期講読している新聞の web サイト，web で自由に閲覧できる新聞のデジタル版から記事にアクセスした。煩雑になることを避けるため，アクセス日と URL は省略する。】

Emmanuel Poncet, « Lous and the Yakuza… dans la lumière », *L'Express,* 2020-03-10.

Stéphanie Le Bars, « Amanda Gorman, une jeune poétesse au service de la justice sociale », *Le Monde,* 2021-01-29.

« La jeune poétesse américaine Amanda Gorman va être publiée en français » *Agence France Presse,* 2021-02-17.

« Plus de 23 tonnes de cocaïne saisies en Allemagne et en Belgique », *Le Monde avec AFP,* 2021-02-24.

Janice Deul, "Opinie : Een witte vertaler voor poëzie van Amanda Gorman : onbegrijpelijk", *De Volkskrant,* 2021-02-25.

Alison Flood, "Shocked by the uproar : Amanda Gorman's white translator quits", *The Guardian,* 2021-03-01.

Mohamed Ouaamari, "Amanda Gorman zou nooit uitgegeven worden als zij in België of Nederland woonde. Kijk de fondsen er maar op na", *De Morgen,* 2021-03-01.

Wilma de Rek, "Literatuur gaat altijd over je verplaatsen in een ander. Wie daaraan tornt is gevaarlijk bezig", *De Volkskrant,* 2021-03-03.

Jean-Pierre Stroobants, « Aux Pays-Bas, le choix d'une autrice blanche pour traduire la poète noire Amanda Gorman suscite la controverse », *Le Monde,* 2021-03-03.

Valérie Marin La Meslée, « L'idée qu'il faille être noir pour traduire un Noir est terrifi-

ante », *Le Point.fr,* 2021-03-04.

Alison Flood, “Marieke Lucas Rijneveld writes poem about Amanda Gorman furore”, *The Guardian,* 2021-03-06.

Kenan Malik, “Lost in translation : the dead end of dividing the world on identity lines”, *The Guardian,* 2021-03-07.

Tobias Rüther, “Ist das Entmündigung?”, *Frankfurter Allgemeine Zeitung,* 2021-03-07.

“Not suitable : Catalan translator for Amanda Gorman poem removed”, *The Guardian,* 2021-03-10.

« Ils cherchaient un profil différent : le traducteur en catalan de la poétesse Amanda Gorman remercié » *Le Monde avec AFP,* 2021-03-11.

André Markowicz, « André Markowicz, traducteur, sur l’affaire Amanda Gorman : Personne n’a le droit de me dire ce que j’ai le droit de traduire ou pas », *Le Monde,* 2021-03-11.

Miriam Berger, “White translator removed from Amanda Gorman Poem, amid controversy in Europe”, *The Washington Post,* 2021-03-11.

Jordi Nopca & Sílvia Marimon, “Who should translate Amanda Gorman?”, *ARA,* 2021-03-13.

Virginie Larousse, « Delphine Horvilleur : La laïcité est une forme de transcendance, une promesse d’infini », *Le Monde,* 2021-03-14.

Dorany Pineda, “Amanda Gorman brings the representation debate to the small world of book translation”, *Los Angeles Times,* 2021-03-22.

Alex Marshall, “Amanda Gorman’s Poetry United Critics. It’s Dividing Translators”, *New York Times,* 2021-03-26.

Stefan Lüddemann, “Die mitreißende Hymne vertrocknet zum Traktat ; Die deutsche Übersetzung von Amanda Gormans “The Hill We Climb” ist eine politisch korrekte Enttäuschung”, *Kölnische Rundschau,* 2021-03-30.

Anne-Catherine Simon, “Amanda Gorman auf Deutsch : Zu viel “Wir” verdirbt den Vers”, *Die Presse,* 2021-03-30.

Michael Wurmitzer, “Gorman-Gedicht : Deutsche Übersetzung in höchstem Maß missglückt”, *Der Standard,* 2021-03-30.

Andrian Kreye, “Amanda Gormans “The Hill We Climb”－Ein Stein de Hoffnung”, *Süddeutsche Zeitung,* 2021-03-31.

« Affaire Amanda Gorman : La traduction, métisse, mixte par définition, est “queer” de facto », *Le Monde,* 2021-04-11.

Alexandre Duyck, « Plus qu’un lecteur du texte, presque un coauteur : les traducteurs, ces plumes de l’ombre », *Le Monde,* 2021-05-17.

Valérie Marin La Meslée, « Exclusif. Lous and the Yakuza : les confidences de la nouvelle

idole des jeunes », *Le Point.fr,* 2021-05-18.

« Lous and the Yakuza : La couleur n'est pas un critère pour un traducteur », *Le Point.fr,* 2021-05-20.

« Le pronom "iel" ajouté par Le Robert dans son édition en ligne », *Le Monde,* 2021-11-17.

（関西学院大学文学部教授）